



森に息づく音がはぐくむ人と文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹井, 成美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1701

森に息づく音がはぐくむ人と文化

教育学部 音楽教育講座 竹井 成美



「Réveillez vous cœurs endormis, Le dieu d'amours vous sonne 目をさませ、眠れる心よ。愛の神がお前を呼んでいる」。16世紀のフランスの作曲家クレマン・ジャヌカン（1485ころ～1558）の代表的ア・カペラ合唱作品＜鳥の歌＞は、このようにして始まる。この作品には、眠れる心を目覚めさせるために神から遣わされた森の鳥たちが次々と登場する。Ti ti pity, chou thi thouy. Ticun ticun。Oy ty oy ty。Coqu coqu と、各パートに鳥の鳴き声の擬音がちりばめられ、ワキアカツムギ、ホシムクドリ、カッコウたちが鳴き交わす。当時、ジャヌカンの生きたフランスの地に生息していた鳥たちの声は、楽譜の中に閉じこめられて伝えられ、400年の時空を超えて再び音として現代に生き生きとよみがえる。古代ギリシャ時代のアリストテレスに「声よし鳥」と言わしめたナイチンゲールが、Frian, frian～tar tar tar～、とひとときわ高らかに歌う様は、聴く者の心を、日本には生息しないナイチンゲールの棲むヨーロッパの森へと誘う。

この合唱曲との出会いは、学生時代にさかのぼる。以来、研究の対象を、ピアノ音楽からルネッサンス時代の音楽へと方向転換させた思い出深い音楽となる。この音楽を耳にすると、その時代の周りの風景までもがふっとよみがえる。路面電車のきしむ音とともに左右に揺れる友の顔。薄汚い合唱団の部室から見えるメタセコイアの整然と並ぶ構内。あのころ流行っていた長髪の男子学生の顔々。ミニスカートの女子学生のファッションの色遣い、などなど。いつしか、過去に体験した世界を追体験するだけでなく、今現在、まさにその場所で呼吸しているかのように、仮想の現実の世界にも遊んでいることに気づく。

1. 音が喚起する力

そもそも音は、空気中を、あるいは水中を、あるいは固体中を「波」となって伝わり、時間の中で立ち上がりつつ消えるという時間的存在である。ラジオやテレビの時報で最初に鳴る音（一点イ音）は、1秒間に440回往復振動する音波からなり、その波長は約77センチとされる。つまり時報が鳴るとき、1秒間に約77センチの長さの見えない波（空気中の希薄な部分をはさんで密な部分と密な部分の距離が約77センチの波）が440個、次から次に空気中に押し出されていることになる。音楽は、そのような音による、しかも異なる高さの音による建築である。音楽が鳴り響くとき、さまざまな長さの「音波」の、目には見えない建物が、幾重にも波模様を描きながら立ち現れては消えていく。その音の波は、音源から一瞬のうちに運ばれ鼓膜を震わせる。それから先、どのような過程を経て人の意識の中で音の像が結ばれるのだろうか。しかも、そのうちのいくつかは、その一瞬、一瞬を切り取り、視覚や味覚、触覚、嗅覚までもを動員して人の記憶の中に棲みつく。そして、かなりの時を経て、音の記憶をたぐりよせるとき、当時確かに機能していた他の感覚をも呼び起こし、今まさに存在するかのように、過去の風景をイメージによみがえらせることができるし、想像の中で現在の風景と重ねあわせることもできる。

興味深い小説がある；疲れた詩人は、もはや帰ることのできない遠い故郷の友人にテープレコーダーを託して、故郷の音の数々を録音してもらうことを思いつく。森の音。木々

の葉をわたる風の音。鳥の鳴き声。刻々と変化する、それらの音たちは、友人の手でテープレコーダーに閉じこめられ詩人の元に届けられた。ほどなくして詩人は帰らぬ人となる。詩人が求めたのは、なぜ写真ではなく音だったのだろうか。

写真は、人の目で選ばれたカットで一瞬の現実を切り取って伝える。テープレコーダーも、人の耳で選ばれた一瞬の現実を切り取って伝える。違うのは、写真には音が写っていない点であり、テープレコーダーには映像が収録されていない点である。もちろん写真の中にも、時として音の風景を見だし、その音を想像・創造することは可能である。また反対に、今切り取られた写真の中の風景に、想像の輪を広げて、かつて見た時の風景を重ねて見ることも可能であろう。

しかし詩人は、あえて今故郷で鳴り響く音を選択したのはなぜなのか。彼は、テープレコーダーにパックされた今の音から昔を「懐かしむ」のではなく、むしろ、その現実の音を媒介として、自らの想像の内部に分け入り、今という現在を故郷とともに「生きよう」としたのではないか。音に宿る時間性・空間性・生命性こそが、同じく時間と空間を生きる人の、詩人の今現在の心を「喚起させる」ことができたのではないか。音は見えない分、現に見える写真以上に、聞く人の心を喚起し、その想像・創造力を目覚めさせるのではないか。

2. 鳥の鳴き声が喚起する力

鳥の鳴き声が人の心を喚起した例もある。フランスの現代音楽作曲家オリヴィエ・メシアン（1908 ～ 1992）の制作意欲は、鳥たちによって呼び戻された。自らの作曲に行き詰まりを感じていたメシアンは、1958年のブリュッセルでの万国博で次のように講演している。「すべてがだめになり、道を失い、なに一つ語るべきものがないとき、いかなる先人に習えばよいのか。深淵から抜け出るためにいかなるデーモンに呼びかけるべきなのか。絶望している者に信頼を取り戻す人間的な音楽がない。この時にこそ大自然の声に学ぶべきなのである」。

メシアンは、14、15歳のころ鳥たちの歌を書き記していた。自らの進むべき道を見失ったとき、師であるポール・デュカス（1865 ～ 1935）の「小鳥の声を聞きたまえ。彼らは巨匠である」という言葉に後押しされ、大自然の声としての「鳥たちの歌」を思い起こし、鳥たちのすべての歌をテープレコーダーに吹き込み、その中から自らの耳で識別的に芸術的にその旋律を五線譜に書き写し始めた。あまりにも速く、あまりにも高音域で、あまりにも豊かな音色で歌う「鳥たちの歌」を、自らの手で、楽器のための音楽に変形・昇華させ、珠玉な作品として発表していく。＜世の終わりのための四重奏曲＞（1940）の第1楽章には、クロウタドリとサヨナキドリが歌い、＜幼子イエズスに注ぐ20の眼差し＞（1944）には、サヨナキドリ、ヒバリなど、計8種類の鳥たちが鳴き交わす。フルートとピアノのための＜クロツグミ＞（1952）、ピアノと管弦楽のための＜鳥たちの目覚め＞（1953）、そして、実に77種類の鳥たちがさえずるメシアンの超大作・独奏ピアノのための＜鳥のカタログ＞（1956～1958）へと結集していく。

＜鳥のカタログ＞では、キバシガラスやキガシラコウライウグイスなど、13種類の鳥が主人公である。その主人公の鳥や、その生息地を取り巻く風景が、仲間の鳥たちとの1日の時間的推移の中で様々に変化していく様が、一台のピアノで表現されていく。6曲目

の<モリヒバリ>に添えられたメシアン自身によるプログラム・ノートには次のように記されている。「フォレ山地～街道右手には松の森、左手には牧草地が広がる。真っ暗闇の空高くから、モリヒバリが一連の流麗な半音階的に下降する節を2音重複の形で響かせる。森の空き地の茂みに隠れた1羽のサヨナキドリがそれに応える。モリヒバリの天高くから聞こえてくる神秘的な声とサヨナキドリの鋭い震え声とのコントラスト。～モリヒバリは、姿を現さぬまま近づき、遠ざかっていく。木々も野原も真っ暗で静かである。真夜中だ」。5分半ほどの作品であるが、1950年代のフランス・フォレ地方に確かに生息していたモリヒバリとサヨナキドリの声は、メシアンの手によって芸術に高められ楽譜の中に閉じこめられ、現代のピアニストの手によって再びよみがえる。ときには色彩的に、ときには温度差をもって、ときには香りさえともなってよみがえる。

3. 森に息づく音のはぐくむ人と文化

森には、様々な音が息づいている。四季折々に音は変化する。冬に息をひそめていた音たちは、今また春のひざしを察知して、そろりそろりと起き始めているだろう。21世紀を前にして、疲弊した社会に生きる現代人の心を慰める、いわば「癒しの音楽」として、森にこだまする様々な音をそのままパックしたCDがささやかなブームとなって久しい。CDデッキでリアルに再現される森の音たち。数種類の鳥たちが鳴き交わす声。穏やかに時が推移していた森に、突然鋭い叫び声が広がり、一瞬のうちに森を震撼とさせる。刻々と変化する森の音に耳を傾けて2、3分。突然、それらの音たちは、距離感をともなって人に迫ってくる。人のイメージの中に急に立ち上がる音の像。不思議な瞬間だ。鳥たちの声だけでなく、木々を揺らす風の音さえ聞こえ始める。今まで浮かび上がってこなかった微細な音群が人を包み込み、未だ分け入ったことのない森の中に人を置く。CDとは言え、確かに、森に息づく音たちは、人の耳を育て、音の背後にある気配を感じる五感さえ育てている。

そして、ジャヌカンやメシアンの例のように、森の音たちは、作曲家の心を喚起し、その心を介して芸術へと高められ永遠に伝えられていく。ジャヌカンの生きた時代の鳥たちは、もはやそこに生息していない。メシアンがスケッチした鳥たちは、もはやそこにはいない。しかし、楽譜の中で永遠に休息しながら、いつでも、現代の演奏家の心と手を介して今という現代によみがえることができる。

森に息づく音たちは、人の心を喚起し、その人の心を経て文化へと昇華する。都市と対極に森はあり、人は、その音の恵みにはぐくまれ、その心豊かな人の手で芸術的に耕され文化（文化の語源は *cultura* で、耕すという意）として永遠に生き続ける。

参考文献；

アントニオ・スカルメタ著・鈴木玲子訳「イル・ポステイーノ」徳間書店、1996。

石田一志解説「メシアン；鳥のカタログ」ポリドール株式会社、1994。

竹井成美「音楽を見る！」音楽之友社、1997。

中川真編「小さな音風景」時事通信社、1997。

皆川達夫編「フランス世俗曲1」全音楽譜出版社、1972。

環境庁選定「日本の音風景100選」ファミリー音楽産業株式会社、1997。